

風の流れに

うちが小さい頃には、子供が六歳六月六日目を迎えますとお師匠さんの所にご挨拶に連れられまして、お稽古始めをする慣習がございました。

昔のお稽古事は躰を兼ねておりましてとかで、小さい頃から他人であるお師匠様の元で、少し緊張しながら社会性を身につけるのが目的だったようにございます。何度も何度も繰り返し稽古事を会得していく課程で、知らない間に大人になるために必要な人格形成と礼儀作法を学んだとのことでございます。

とはいえ、うちの生家は貧しゅうて、その年頃には口減らしのために「端女見習い」として住み込み奉公に出されたのでございます。

うちが出された先は「伊勢屋」と申しまして、この辺では一、二を競う生系の^{お目だ}大店でございました。うちのような小さ

おかだ よしこ

い子は、子守の他、水くみや薪運び、雑巾がけ、使い走りなどの雑事にあてがわれるのでございますが、どれも小さい体にはきつい仕事でございました。

大人の奉公人にも辛い事があつたのでございましょうか、たまにはきつい言葉を投げかけられる事もございました。が、普段はよく面倒を見て頂いて居りました。何しろ大店でございます。

大旦那様や大奥様はお心が広く穏やかなお人でございましたから、普段は奉公人も案外伸びやかに仲良く働んでおりました。とりわけ大奥様は、気配り豊かな面見の良い方でいらつしやいましたから、お店には常にお人の出入りが忙しゅうございました。

店先には、近隣の商人ばかりではなく、遠方からも幾多の行商人が出入りをしておりまして、手代達も忙しく働いておりました。表ばかりか裏もまた、近隣の者

の相談事や物売りなどでごつた返しておりました。加えて、奥には旦那衆などご要職の方々を始め旦那様のご趣味のお仲間など、多くのご客人が絶え間なくお越しでございました。大奥様はそれらの一切を取り仕切っておられたのでございます。

お興入れ間もない若奥様も大奥様を手伝い、どなたにも細やかなお心をお寄せになつておられました。巷では「美しくできた嫁」と噂され、順調な走りだしとお見受けしておりました。

ところが月日が経ち、なかなかお子に恵まれないことがお辛かつたのでございましょうか、奥様は次第に沈みがちになり、お部屋に留まる事が多くなられたのでございます。

そんなご境遇からか、いつの間にか雇われて間もない小さいうちを、しばしばお側にお呼びくださつたのでございます。

裏も多忙で、奥様のお相手の時間を惜しんで立ち働いておりましたので、余り役に立たないうちがその役を担うことになりました事も幸い致しました。

奥様思いの若旦那さまも、奥様のお気

に入りのうちを密かに応援して下さったようにございます。

とはいうものの、何の嫌もされていないうちでございますから、なかなかご期待に添う事も叶わなかつたのでございます。

初めて入れた茶を奥様のところにお持ちした時のことでございます。奥様が口にされるのを緊張して待つて居りました。一口召し上がった奥様は、驚いたようにうちを見て「クスッ」とお笑いになつて茶碗を戻されたのでございます。

「このお茶は特別な味だわ」「あんまり特別で勿体ないから私はもういいわ。あなたも味わつてはどうかしら? どうぞ!」と、和やかに押し出されたのでございます。戸惑つておりますと「ほら、遠慮しないで」と、うちの膝元まで手を伸ばされたのでございます。うちはちよつと恥ずかしかつたのですが「はい」と言つて、いつも奥様がされるように二手で茶碗を取つて「おちよぼ口」でお茶を少しだけ含みました。緊張のせい、乾いた口に放たれた水分は瞬間に何処かに吸い取られて、前よりもつと渴いた気がいたし

ました。

「如何?」と、お尋ねになる奥様に「もう解りません。なんだか、前よりもつと口が渴いております」「あらま! 大変。大丈夫? 毒のせいではないかしら?」「そんなことありません。毒なんか入れていません」うちはうろたえて訴えました。奥様は「うふふ……冗談ですよ。この家に毒など何一つありませんからね。あなたが余りにも緊張しているから少しからかつたですよ」と仰いました。うちも、恥ずかしいのを紛らわすように少し笑つて見せました。

奥様は「そうよ。力を抜いて深呼吸してから、お茶さんにご挨拶するのよ。ごんには、初めまして」とね「お茶碗の中のお茶さんはどんな様子かしら? 香はどうかしら? どんなお色かしらね。よく見て、ご挨拶が終わつたら、いただきます」と感謝してゆつくりお口に含むといいわ「さあ、もう一度、ゆつくりお口に含んでごらんさい」と両手で示すようにお示しくださいました。

うちは仰るままに、茶碗を覗き込み「ごんにちは」と小さくご挨拶してから、

大げさな深呼吸をして「いただきます」と言いました。それから奥様の真似をして、やつぱりおちよぼ口で頂きました。今度は程良く口に含ませることができました。お茶は澄んだ緑色が綺麗で、ほんのりとした香りが、まるで奥様のようでございました。

奥様は「どう? 美味しい?」と尋ねてくださいました。うちは、「はい。まるで奥様のようなお味です」と応えました。奥様は「あら! 私の味なの?」と驚いたように仰いました。「だって、きれいな色だから……」奥様は「この色が私に似てるのね。お味はどう?」「どうと仰つても、うちは白湯しか頂いたことがありませんから……きつと美味しかつたに違いありません」「あら、そうなの? でも嬉しいわ。私の味だなんて。考えたこともなかつたわ」「お茶は、心を込めて入れると、その分、美味しく応えてくれるですよ」「良く頑張つたわね。これはご褒美ですよ」と菓子懐紙に包んで差し出されたのでございます。

その時うちは、奥様のお言葉通り、う

ちの入れた茶が余りにも美味しかったので、褒美にお菓子をくださったのだと思っております。

上機嫌のうちは、早速、うちよりいくらから年上のキヨに自慢しながら、物置きの蔭で褒美の菓子を分け合ったのでございます。

薄紙に包まれたそれは、表面に胡麻が散らばった薄い焼きせんべいでございます。口に運びますと、その中で弾けるような音を立てながら香ばしさと、ほんのりとした甘味を運んできました。何よりパリパリという歯切れの良い音が小気味良く、二人で行儀もかまわず大きな口を開けたまま競うように音を楽しんだのでございます。

それは、まるで町場のお祭りのような華やかなリズムで、うちを褒め称えてくれているかのようにございました。

後に解ったことですが、あの茶はあきれるほどに不味い茶だったそうにございます。それでも奥様は“ご自分の色”と言われたことに想わぬ郷愁に駆られたのでございましょうか。きっと、

柔らかな光り射す故郷の風景を彷彿とさせるのに違いありません。

ともあれ、その後は茶など頂いたことも無いうちに、少しずつ手順や味の妙などを教えてくださるようになったのでございます。その度に添えられた菓子は当たり前のように、うちの懐に匿ってくださるのでございました。

こうして獲得した褒美は“秘密の分配”として、キヨといつもの隠れ場で舌鼓をしながら特別な友情を培ったのでございます。

キヨは少し鈍いところがございまして、年端のいかないうちほどにも役に立たず、に怒られてばかり居りました。「へえ、すんまへん」と頭を下げながらも、その体を支えるかのように誰よりもよく食べ、食べ過ぎるせいか動きも鈍く、またまた叱られるのでございました。

それでも、めげることもなく笑顔を絶やさず精一杯励んでおりました。ここに来て間もないうちには、そんなキヨから掛けられる笑顔や、プロプロの暖かい掌に包まれるのが「何にも勝る」褒美に

思えたのでございます。時々キヨの手助けをしながら“秘密の分配”を仲良く続けて居りました。

ある日、突然キヨは迎えに来た母親に手を引かれて帰って行きました。大きな背中に着替えが包まれた膨らんだ風呂敷を背負い、力なく去って行く姿をたった一人で寂しく見送ったのでございます。

それでもキヨが居なくなりましてからは、その仕事が回されたおかげで寂しさや想う間もない程に忙しく立ち働いておりました。

そんなうちを見かねたのか、それともご自分の寂しさを紛らわされるためか、奥様は前にも増してうちをお呼びくださったのでございます。

冬の寒い日には冷たい雑巾がけをしなくて良いように、夏には暑い外の仕事に就かなくても良いようにと、度々うちをお呼びくださり作法や読み書きなどの手習いを教えてくださったのでございます。こうして、次第に稽古のお相手やご趣味の手伝いなど、お側にお呼びくださる時間が増えていったのでございます。

今では茶も、お客様にお出しできるほどに美味しく入れることができるようになっております。既に褒美を分け合う友もなく、*「あそこ」*でキヨを懐かしみながらこっそり頂くのございました。

やがて外稽古のお伴をさせていただくようにもなりました。稽古を待つ時間は愉しく、控える廊下の隅に漏れ聞える耳覚えで、すっかり会得してしまふことも多くなりました。それは奥様の復習にもいくらかはお役に立たせていただけると、一層熱心に聴き入ったのでございます。

さて、どこの稽古にも良家の子女や若奥様がお越しでございます。

それぞれ端女を伴に連れて来るのが常でございます。勿論、顔を合わせる端女の中には気の合う子もおりましたが、余り話す機会はありませんでした。それでも目配せをしたり、時には、すれ違わずに菓子や菓子を互いの袂にすり入れて分け合う一瞬のスリルを楽しんだのでございます。

その頃、大人の世界では其処での端女

の器量や身だしなみ、躰などを雇い主の*「格」*のように観られて密かに競っておられたとのことでございます。

そんなことに頓着される奥様ではございませんが、うちは他の端女とは少し違っております。うちは、まるで奥様のお側付きのようにご一緒させて頂くことが多かつたためか、小さいにも関わらず、何時の間にか*「愛想の良い行儀の良い子」*として、よそ様にも可愛がって頂くようになつていたのでございます。うちの評判が良いことは、奥様にも箔を付ける事でもございます。奥様は益々うちを可愛いがってくださいたのでございます。

今、想いますと、勿体ないことに奥様は密かに待つ*「お子」*をうちに重ねておられたのでございますか。端女のうちには過ぎたお心遣いだったように思えます。

若旦那様は、そんな奥様のご様子を論されることもなく、ご縁が授からない事で沈みがちの奥様を心底気遣つて居られたのでございます。うちには「お天氣の好い日には、できるだけ散歩にお連れするように」と耳打ちされるのでございま

した。

ある散歩の帰り道の事でございます。

奥様は、木立ちの向こうに見え隠れする赤い鳥居に気付かれたのでございます。早速、鳥居を目指しますと、背の高い木々の間に奥へと続く小道がありました。鳥居をくぐりますと、ひんやりとした別世界に迷い込んだような空気の先に、ひっそりと閉じられたままの神殿がございました。その脇には「願掛け宮こちら」と書かれたケバケバしい矢印が、妙に生々しく目に飛び込んで来たのでございます。すると、奥様は逸るように矢印の方に向かわれたのでございます。

そこには、うちの背丈ほどもない貧相な祠と、それに不似合いな程に大きい賽銭箱が備え付けられておりました。横には「願掛け効用」が所狭しと記された看板が、今にも倒れそうに立つておりました。奥様は看板を眺め、暫く「お参り」をされますと、まるで断ち切るように踵を返されたのでございます。

通り過ぎた道なりにある主神殿の前で不意に足を止められますと、慌ただしく

小銭を差し出され「あなたも、何かお願
いごとをするといいわ」その片方の手は
既に鈴緒を引かれていたのでございます。
密やかな鈴の音は、木々を過ぎる風に吸
い込まれるように弱々しく消えていきま
した。何を願って居られるのか、其処に
佇ずまれる奥様のお姿が頼りなく寂しげ
でございました。うちはすぐ横で、手に
余る太い鈴緒を力一杯に握りしめて何度
も揺らして「大好きな奥様がもつとお元氣
になられますように」と一氣にお願いし
ました。静寂の中、思いのほか木霊した
鈴の音に驚いたように振り返った奥様は
うちに視線を移され少し微笑まりました。

それ以来、散歩の帰りには足繁く神社
に立ち寄るようになられたのでございま
す。

有り難いことに、その先の川沿いには
名物の団子茶屋がありました。

そうして短い散歩と神社の帰りには、
必ず川沿いの茶店に立ち寄ることになっ
たのでございます。

奥様は決まって人目に付かない奥ま
つた席をお取りになり、名物の団子を頼ん
でくださったのでございます。運ばれた
団子を手渡しながら「ゆっくりお食べ。
家の者には内緒ですよ」と、都度、念を
押され、頬張るうちを満足げにご覧にな
るのでございます。満ち足りるというの
は、こういう刻を申すのでございませよ
うか。それはそれは幸せな至福の刻で
ございました。

うちは、此処で初めて串に刺された団
子を口にした、あの日のことを忘れたこ
とがございません。

汗ばんだ梅雨明けの頃でございました。
奥まつた縁先に奥様と並んで腰掛けた
日のことでございます。

こんなに立派な縁先に奥様とびつたり
と並んで座するなど考えたこともございま
せんでした。

そこには、よそ行き下駄の鼻緒と同じ、
真っ赤な毛氈が敷かれておりました。

今でも、枝を広げた楠の木が縁先に影
を創る木漏れ日の中を縫うように煌いた、
あのクラクラする程に鮮やかな朱の色を、
昨日のこのように思い出すことができ
るのでございます。

汗ばんだ蒸し暑い日、川沿いのしだれ

柳に誘われて流れ込む風が涼やかに、
ゆつたりと体をすり抜けて行きました。
余りの心地良さと身分違いの贅沢に、味
わったことのない夢のような感覚が全身
を駆け巡る痺れと、浮き立つような恍惚
感にうっとりとしておりました。

不意に、後ろから柔らかな手が伸びて、
ギュッと引き寄せられたのでございま
す。驚いて見上げた奥様は、手を緩める
こともなく遙か遠くに見える川向こうの
入道雲をぼんやりと眺めておられたので
ございました。

風がそおつと、私たちをなぞるように
過ぎ去るのを見届けるかのように、その
行き先に遠く視線を移され、なぞつてお
られるかのようにございました。再び、
風が背中を押すように吹き抜けますと、
奥様の手がするりと肩から滑り落ちまし
た。すると奥様は、そつと前屈みにうち
をのぞき込まれて微笑みながら体を離さ
れたのでございます。

奥様の柔らかな胸の鼓動に触れた一瞬
の出来事でございます。

今となつては、たった一度の夢のよう
な深く心のひだに染み入った忘れがたい

想い出でございます。

あの日の、おつかさんにも味わったことのない、少し甘いような優しい奥様の香りで満ち足りた、一瞬のようでもあり永い刻でもあったような気の遠くなるような不思議な感覚でございます。

暫く致しますと茶店の婆が、名物の団子を白湯と一緒に丸いお盆に乗せて運んできました。婆は目を合わずこともなく、盆を置くこと忙しげに去って行きました。

奥様は先のことなどお忘れになったかのように、このところ聞いたこともない弾んだ声で串に指された団子を取られて「お食べ！ あの婆が創った名物の団子ですよ。家の者には内緒ですよ」と差し出されたのでございます。いつもと違う奥様の高い声に誘われるかのように、何故か慌てて団子をまるごと頬張っております。

それは使い込んだ木皿に、小さな丸い団子が三つ串に刺されたなんの変哲も無い団子でございました。手にしますと、思いのほかずしりとした感触がありました。何故か、慌てて口にしたそれは、顔の形が変わるほどに口いっぱい膨ら

んだのでございます。

何故、慌てて丸ごと頬張ってしまったのか、恥ずかしく思いながらも、思い切つて噛みました。それは、蕩けるように柔らかい餅からにじみ出る餡子と共に、世の中にこんなな美味しいものがあるなどと信じられない程の美味しさでございます。からだごと溶けてしまうほどに口の中いっぱい、ゆっくりと染み込んでいくような心地の良さでございました。

それは奥様の腕の中にいた一瞬の感覚が蘇るような満ち足りた時を思い出させてくれる美味しさでも申しましょか。うちは、この幸せが逃げてしまわないように、勿体なくて飲み込めないままにコロコロと口の中で転がしていたのでございます。やがて、小さくなつてしまった欠片をひと思いに「ゴクリ」と飲み込んで、二つ目の団子を頬張つた時のことでございます。

突然、涙が溢れ出たのでございます。自分でも驚くほどに突然のことでございます。

それは不意に、奥様の柔らかかな「愛」に触れた喜びに懐かしさを重ねたような

団子に郷愁を誘われたからにございます。それはこんなに美味しいものを口にする事のない、里のおつ母さんや妹達のこととが突然脳裏をよぎり、たちまち頭に一杯に広がったからでございます。

おつ母さんは、うちら姉妹のために昼夜、暇を惜しんで働いておりました。そういうえば、うちらはおつ母さんに甘えたことなど一度もなかつたのでございます。苦勞の多いおつ母さんに、せめて負担にならないよう、心配掛けないようにと氣遣い、率先して仕事を手伝い良い子にしていたように思います。貧しい暮らしとは、そんな子供らしい心さえ奪つてしまふ程に厳しいものだったと、ふと思ひ当たつたのでございます。

奥様の温もりを知るまで、そんなこと「想う」事すらございませんでした。幼いといえど、それ程に「生きる」ことに必死な日々でございました。

あの頃、おつ母さんに何かもつと出来たのではないかなどと、術もない「あの日」のおつ母さんが不憫に想えたのでこ

ざいます。

妹はもう奉公に出されたかしら。奉公先は辛くはないかしら。そう思いますと、自分の境遇の余りの勿体なさに、里の家族への想いが一層に募つたのでございませう。

食べ掛けの串を手持つたまま呆然と涙するうちに驚いたように、奥様は今も額が触れる程に近づいて仰いました。「どうしたの、喉に詰まつたの？ 具合が悪いの？」奥様の柔らかい手が肩に触れた途端、堪えていた想いが込み上げ、思わず「わつ」と堰を切つたように一層の涙が溢れ出たのでございませう。

奉公した日から少しは成長いたしました、が、うちは未だ十にも満たない子供でございませう。突然のことに驚かれた奥様は、再びうちを抱きしめて仰いました。「どうしたの？」「何か辛い事でもあるの？」「仕事があつたの？」と優しく問ひかけて下さるのでございませう。

うちは、大きく首を横に振りながら却つて泣きじゃくつて言いました。「そうじゃありません。この団子が余りにも美味しくて、何故か哀しいのでございませう」初めて頂く団子の美味しさに里を想ひ、

ふと、贅沢させて貰っている自分の幸せと、一生口にする事が無いかもしれないおつ母さんや妹達への申し訳なきが募つたのだと。

妹達はどうしているのかしら。ひもじさの中、暇を惜しんで働いていたおつ母さんや、妹達のが走馬灯のように思ひ出されたのでございませう。今まで、里のことなど考える余裕すらなかつたのに、奥様の優しさに「ふつ」と緊張が解れて里への想いが募つたのだとお応えしました。

あの頃、家族のためにと出稼ぎに行つたおつ父さんは、たつた一度、姿を見せたり遂に帰つては来ませんでした。土産にと渡された下駄の歯は跡形もないほどにすり減り、踵がはみ出るくらいに小さくなつておりました。おつ母さんは相変わらず狭い畑を耕しながら、やはり貧しく残された近隣の女達と助け合いながら、おつ父さんを待つておりました。

どれほど頑張つてもおつ父さんは行方知れずのまま、厳しい暮らしは変わることはありませんでした。おつ父さんばかりではなく、出稼ぎに行つた男達の多く

も又、再び帰ることはありませんでした。時折届いたお金もいつしか途絶え、便りのないまま行方知れずになるのでございませう。

里では、誰もが貧しく互いに支え合つてはおりましたが、何処も長男を除いた6〜8才を迎えた子供から順番に、口減らしの奉公に遣られるのが常でございませう。

未だ「間引き」の風習が残る時代でございませう。口減らしとはいへ、命が繋がれただけでも幸運だつたのかもしれない。

口減らし奉公とは、その名の通り「口減らし」が目的でございませう。多くの場合、年期も無く支度金も支払われないことも在つたそうにございませう。運悪く、心ない請け負いに託された者の中には、生涯奴隷のように苦役を強いられる事もあつたそうにございませう。たとえ支度金を渡されたとしても、僅かばかりの金は束の間の喉を潤すほどのものであつたそうにございませう。

そうして里を出た子らの多くも、出稼ぎに出た男達と同様に、様々の事情で帰れない者が多くいたそうにございませう。

貧しい者には、何処に生きても厳しい人生だったのをごさいます。特に読み書きもできないまま出された子等は、里への連絡の術もなく路銀の調達もできないまま、いつの日か帰る古里を夢見ながら老いていく者も多いと言われます。何れの場合も、帰る当てのない旅立ちは心細いものをごさいます。

それでなくとも、十にも満たない子が親元を離れての奉公は寂しく辛いものをごさいます。手紙を交わす手段も無く、遠く奉公へと引き離される悲哀が至る所で繰り返されていたのをごさいます。里に残っても離れても、厳しい現実は変わるものではなかったように思います。貧乏な家に生まれた不運のおつ母さんや妹達をかつての自分の寂しさに重ね、いつそこの不憫さに胸が潰れる思いに駆られたのをごさいます。「里の者にも食べさせてやりたい」きっと一生分の幸せを思うに違いありません。

そう思いますと「贅沢な境遇にいる自分が、ただただ申し訳なく、勿体なく、涙が溢れたのをごさいます」そうして、じっと団子を見つめたまましゃくりをあ

げるうちに奥様は、まるで母様のように心をお寄せ下さったのをごさいます。うちは何度も何度も呟きました。

「こんなに美味しいもん初めて頂いたのをごさいます。美味しゅうて美味しゅうて……幸せ過ぎて、何か里の者に申し訳ないのでごさいます」涙ながらに連呼しておりました。

「あらまあ、なんてこと！奥様は、抱きしめた手を一層強めて「可哀想に……」と暫く絶句しておられたのをごさいます。

やがて、うちの機嫌を取るかのようによくから明るい声で和やかに、うちの目を覗き込まれました。「すると、残ったこの団子は勿体なくて食べられないのですね。それでは私が代わりに頂いてしまおうかしら？」まるで本当に食べてしまわれそうに仰ったのをごさいます。

うちは驚きました。確かに里の家族に食べさせてやりたいとは思いましたが、今すぐではありません。うちは慌てて言いました。「今はうちが頂きます。別に急いでいる訳ではありませんから」「あら、そうなの。残念だわ」そう仰つて、持っていた団子をうちの口にねじ込むよ

うに入れられたのをごさいます。なんだか恥ずかしさと、しょっぱさが加わった不思議な味が致しました。

その日を境に、奥様は益々頻繁に散歩にお出かけになり、帰りには必ず茶店に立ち寄つて秘密めいた二人だけの時を過ごさせてくださったのをごさいます。里には何もしてやれませんでした。うちはもう寂しくありませんでした。

そんな月日が流れるように続いたある日、番頭さんから「奥様のご懐妊されたので、心得て“お仕えするように”と、奉公人達に“あの”団子が振る舞われたのをごさいます。大皿には、あの茶屋の団子がいつもより大きめの紅白となつて窮屈そうに串に指されてこんもりと盛り立ておりました。

皆は美味しいと喜んで頬張つておりましたが、うちは知らん振りして頂きました。心の中で少し誇らしい気がして一層美味しく頂いたのでごさいます。

お店では翌日を「祝いの日」と定め、

急遽お店を閉めることになったのでございます。そうして晩には、正月ほどにご馳走や酒が並べられ、奥も奉公部屋も夜遅くまで騒々しく、奥様のご懐妊を心底喜び合つたのでございます。

それから間もなく、身重になられた奥様のご安全のために出稽古のお手配がなされ、稽古はお師匠様がお出かけくださるようになったのでございます。

外に出る機会は少なくなりましたが、お天氣の好い日には必ず短い散歩に出かけ、茶店での楽しみは相変わらず密かに続いておりました。

勿論その頃には、うちにはもう大人のよう茶屋での密会にも多少は奥様のお話相手が務まるようになつておりました。奥様は、茶店での一時を懐かしいお里の想い出や心の内を少しずつ話されたのでございます。

其処では、うちには考えも及ばないようなお幸せなご幼少の日々や、恵まれたかに見える窮屈な想いを懐かしげに、時には哀しげに話されたのでございました。

やがて奥様のお計らいからか、うちは

来たるべく「子守役」を命ぜられ、端女の一切の雑事から解放されたのでございます。代わりに、乳母のように赤子の世話などの一切を、奥様とともに学ばせて頂く事にも成つたのでございます。同時に、お子の教育の妨げにならないようにと、以前にも増して読み書きは勿論のこと、稽古のお相伴をもさせていたたくことになつたのでございます。子守役とはいえ、端女が稽古のお相伴をさせて頂くなど異例のことでございます。

奥様も十分に寛がれ、日を追うごとに明るく愉しげにお過ごしていらつしました。

うちも又、その頃には稽古先での耳稽古と奥様の復習で、すっかり稽古の基礎を身に付けていたのでございます。

時折、茶店の婆も訪れました。この地での産婆は、あの茶店の婆只一人とのことでございます。昔は他にも居たこととでございますが、この婆が取り上げた赤子は「幸せになる」との言い伝えがございまして、我が子の幸せを願う親たちによつて、貧富に関わらず近隣のお産の全てはこの婆が世代を超えて取り上げたそうにございます。

暫くして、お腹がせり立つよう大きくなり目立つようになつて参りますと、ご実家からお迎えが来られました。奥様はうちを連れてご実家にお住まいを移されたのでございます。

幸いにも、度重なる茶店での密会で、婆とはすっかり馴染みになつておりました。声を掛けあうことはありませんでしたが、互いの縁に「婆の助手」はすぐさ

茶店での密会はなくなりましたが、其

ま快諾されたのでございます。

それ以降、うちは度々婆に呼び出され、産婆修行を積ませていただいたのでございます。

それに比例するかのように婆の体力も落ち、負担を減らすためにご実家に寝泊まりする日が多くなったのでございます。その頃には、うちも婆の代理として方々に向いておりまして経験を積ませていただいておりますので、一人で大過なく役目を果たすことができるようになっております。

そんなある日、丁度満月の宵のことでございます。

ご待望の刻が訪れたのでございます。奥様は、このほか安産でお嬢様を出産されたのでございます。

ところが驚いたことに、その後にもう一人「やや」がいることが解ったのでございます。

まだ双子が歓迎されない時代でもございました。

それは、奥様と、ご両親、婆とうちだけの秘密事として、先に生まれた赤子は

こっそりと茶店裏の婆のあばら屋で、うちの「縁者」としてお預かりすることになったのでございます。

まだ若い未婚のうちにとって、お子を「引き取る」という突然の申し出は驚きと不安でいっぱいでした。それでも、幼い頃から頂きましたご恩を思いますと、お断りする事も出来ませんでした。精一杯「恩返し」の最後のご奉公と決意して、お育てすることを承諾したのでございます。

すぐさま、奥様に情が移ってはと名前を付けられることも無く早々に洗濯籠の中に包まれた赤子は、ひっそりと裏木戸からうちに抱えられ屋敷を後にしたのでございます。

慌ただしさの中、婆は乳飲み子を持つ家を教えてくれました。やと乳の目処は付いたものの、想像もしていなかった不安な子育てが突如、始まったのでございます。

七日ばかりして婆は戻って参りました。が、憔悴した奥様を気使うお母様からの呼び出しを再三に受け、ご実家に駆けつ

けておりました。

それは老いた婆にも余程の気疲れだったのでございましょうか。その後はすっかり体調を崩しまして、間も無く逝ってしまつたのでございます。

その子は「サト」と名付けました。帰る里のない娘に、せめて故郷に変わる名を授けたかったのでございます。

うちは婆の後を継ぎ、茶店と産婆として生業を立てておりました。勿論、再びお店に呼ばれることはありませんでした。

サトは幼い頃から、まるで自らの定めを悟ったかのように、思慮深く聞き分けの良い子でございました。それを自らに重ね不憚に想うのでございますが、サトはまるで大人のように受け入れ、穏やかに我を張ることもなく慎み深い働き者に育ちました。

家事や茶店の合間には、うちが奥様から授かった全てを教えました。打ち寄せる雑事に疲れを見せることもなく、サトはそれらを真摯に学ぶことも怠りませんでした。

やがて、サトは奥様似の美しく優しい娘になりました。簡素な茶店にはふさわしくないほどに礼儀正しく、まるで立派な宿舎のようなもてなしを、誰にも分けて隔てる事も無く施したのでございます。

たちまち看板娘となり、茶店は広く知られるところともなり益々賑わいを見せたのでございます。時にはご身分の高い方も通われましたが、サトは一向に動ずることもなく、どなたにも心を尽くして接待をするのでございました。サトの評判は益々高まり、茶店は村から手伝いを頼まなければならぬ程に繁盛して居りました。

そんなある日、久々にお店から使いが寄越されたのでございます。

“あの”嬢ちゃまは既に婿を迎え、お子を身ごもつたとの知らせでございます。

奥様からは、嬢ちゃまが安心して出産を迎えられるよう、時々、尋ねて欲しいとの言づつてでございます。その頃には婆も居らず、当然、奥様はそれをご承知の上でうちをお呼びになったのでござい

ます。そうしてうちは、サトと作った“あの団子”を土産に携え、再びお店に出かけるようになったのでございます。

久々にお目に掛かる奥様は、少し老け込まれたようにお見受けいたしました。

木戸を開けますと、待ちかねたように駆け寄られ、握りしめた手の甲を涙で濡らされたのでございます。それは“あの”を、お一人でいかにお苦しみになられたかをうかがわせるものでもございました。

決して口にする事の無い娘の名を、如何に懐かしみ叫ばれたことでもございましょう。

子供の頃、うちが里を懐かしんだように奥様も又、遠い想いに馳せておられたのでございましょう。

それ以来、奥様は“嬢ちゃまの経過見”などと仰りながら、度々うちをお呼びになつたのでございます。うちも又、サトに店を任せて嬢ちゃまの“ご様子見”などと勿体を付けながら、サトの作った団子を携えていそいそとお店に出かけるのでございました。

縁先の日だまりで、茶屋で過ごした“あの”至福の時を、団子を伴に懐かしんだのでございます。

さて、嬢ちゃまは一人娘らしく素直で利発な、少しばかり我が儘にお育ちのようでございます。婿様は穏やかな働き者のようで、大旦那様はじめ、使用人達にも信頼されているご様子が伺えました。ともあれ、嬢ちゃまのご懐妊はお店を一層活気付け、その興奮が手に取るように解るのでございました。

暫くしてお腹が目立ち始めますと、待つていたかのように奥様のご実家から嬢ちゃまを預かりたいとの使いが参りました。早々に奥様は嬢ちゃまを連れてお里に帰られたのでございます。

それからは、遠い昔を呼び起こすかのようによき悪きうちをお呼びになられたのでございます。嬢ちゃまの“づわり”が酷いことに加え、奥様のご体調が優れず、充分なお世話ができない”というのがその最たる理由とされておりました。

ご実家は、隣町にある小さな庄屋でございました。

棚田が入り組んだ僅かばかりの田畑と蚕の養殖を生業とした、のどかな寒村でございました。其処には町の商家とは違う穏やかな和みがありました。

山を背にした村の日差しは、このほか柔らかく、まるで村人を模したかのようにならずかし気に急いで山陰に隠れてしまうのでございます。

だからこそと申せましょうか。命の輝きはことさら美しく感じるのでございました。目前に広がる細切れの棚田が連なる景色は、折々の時間と共に畦に繋がる桑の木々を通り抜け幾重にも重なる色の濃淡を清々しく浮き立たせておりました。また、夜には星達が満天の輝きを放つのでございました。

自然が織りなす色彩の美しさだけでなく、まるで天上からの贈り物を奏でるかのように耳を楽しませてくれたのでございます。朝には光に満ちた葉陰から小鳥たちの歌声を運び、夕には遠く獣たちの声を運ぶなど昼夜を問わず、この一帯を微かな和音と輝きを折々の風が壮大な

自然の妙を奏でるのでございました。それは里人ばかりか、小さな生き物にさえ力強い生命力を育むように、余すところなく里の隅々にまで流れ込み、刻々と移りゆく時の流れを惜しみなく映し込みながら、まるで宝物をなぞるかのようになれぞれの生を讃えているかのようでございました。

あたかもおとぎ話の一コマに滑り込んでしまったような、密やかで柔らかな光が差し込む里でございました。

ここでは、お父様である庄屋様が蚕の養殖への情熱と技術を熱心にご研究され、村人に根気よく指導され、村人もまた、誠実に励んだ信頼の集大成とした結果のようにも見受けられました。おかげで繭の品質も良く、遠方からの繭商人も足しげく訪れるとのことでございます。

ともあれ、村は質素ではございましたが豊かで安定した穏やかな暮らし振りが垣間見られるのでございました。

もしかしたら、うちの里も似たような景色だったかもしれません、このほか貧しい暮らしは、それを愛でる余裕さ

えございませんでした。うちは今、こうした景色を愛でる心の在処を心底幸せに想うのでございます。

さて、嬢ちゃまのご出産は村の一大事でもあり、毎日暇を見つけては祝いや手伝いに立ち寄る村人に溢れておりました。奥様は、お母様と共に訪れる村人の一人一人に耳を傾け、お幸せそうに談笑しておられるのでございました。庄屋家と村人の和やかな関係が、この景色と重なり温和な暮らしぶりを一層際立たせておりました。

やがて、嬢ちゃまのお産が近づき、何かと忙しく泊まり込むことが多くなったうちの着替えを、サトが携えてきた時のことでございます。

こっそりと裏木戸をくぐり抜け包みをうちに手渡すサトが偶然、奥様の目に触れたのでございます。互いが何処かの琴線に触れたのでございましょうか。向き合ったまま、暫くまるで世界中が止まってしまったかのような刻でございました。やがて何事もなかったかのように、サト

は奥様に深い礼をして戸口から立ち去ったのでございます。奥様もまた、閉じられた戸をいつまでもご覧になったまま立ちすくんでおられるお姿が心に残りまして。その後もサトは幾度か参りましたが、用を済ませた後はひっそりと帰って行くのでございました。

そんなある日、一度だけサトは嬢ちゃまと鉢合わせをしたことがございます。

嬢ちゃまは、屈託無げに何処か自分と面影の似たサトを「あなたとは姉妹みたいな気がするわ。宜しくね」などと甘えたのでございます。サトは一瞬驚いた様子ではございましたが和やかにお辞儀をして立ち去ったのでございます。

同じ家に生まれながら、一刻のずれで人生を大きく分かった姉妹の明暗が、心に沁みだした一瞬の出来事でございます。

それから暫くした夕刻、一通りの用事を済ませて裏木戸に向かうサトを、突然奥様が呼び止められたのでございます。サトが振り返る間もなく縁先から裸足のまま走り寄られた奥様が、後ろからサト

を抱き締められたのでございます。その背中が僅かに波打っておられるのを、確かに観たように思います。正に一瞬の出来事でございます。

やがて気を取り戻されたかのように体を離された奥様は、姿勢を正され振り返ることもなく引き返されたのでございます。その時、身動きひとつせず奥様に抱かれていたサトの表情が、今も鮮明に思い出されます。

全ては宿命でございます。あの時のサトの表情が決して不快なものではなかったことが、せめてもの宥めとなったのでございます。

それから暫くした日のことでございます。割れたガラスの欠片のように細く尖った三日月が、寒空の中くつきりと映し出された夜のことでございます。

難産の末、男子を迎えた嬢ちゃまは無事大役を果たされたのでございます。跡継ぎが出来たとの喜びも束の間、嬢ちゃまはお子を残したままお亡くなりになったのでございます。

このことはお店には知らされることも

なく、奥様と里のご両親のたつての願いとして、嬢ちゃまは「サトの名」で闇に紛れるように秘密裏に葬られる事になったのでございます。代わりにサトが嬢ちゃまの「身代わり」として誰にも知らされることもなく、赤子と共に奥様がお店に連れ帰られることになったのでございます。

産後の養生とされた少し永めの余日は、サトにとつて嬢ちゃまに変わる十分な時間だったように想われます。奥様も又、今までの全てを取り戻されるかのようにご熱心に「嬢ちゃまに」成り代わるに必要な細々とした慣習などを諭されたのでございます。

何より、我が儘だった嬢ちゃまのことでございますから、多少お帰りが遅くなっても誰も頓着されることがない事も幸い致しました。

あの日、この裏木戸からこっそりと連れ帰った赤子だったサトを残し、残つて「嬢ちゃま」になった子を、同じ木戸からひっそりと運び去られるのを感慨深く見守ったのでございます。

里の男衆が嬢ちゃまを乗せた籠を木戸から潜り抜けるのを見届けますと、奥様は私を抱きしめて耳元で仰つたのでございます。「ありがとう……」それぞれに万感の思いがございました。

急死した「サト」は、男たちによつて、うちの家に運ばれ「サト」として丁重に埋葬されました。サトは村の誰にも好かれていたからに他なりません。

今も小さなサトの墓には、日々新しい花が絶えたことにはございません。彼方の嬢ちゃまも、きつと違ふ幸せを味わつておられることではございません。

一人残されたうちも、当初は寂しく思うこともございましたが、サトのために念願のことであつたと思ひ直しましてからは、立派に育てあげた自分を密かに誇りに思うようになっておりました。

それに、茶店の手伝いに来ていた娘は婿取りをして後を継いでくれ、ありがたいことに気遣いもしてくるのでございます。おかげで、うちのんびりと幸せに暮らさせて貰つております。

さて、お店に戻つた「嬢ちゃま」でございますが、奥様の手助けもあり、昔からこの家の嬢ちゃまであつたかのように、否、それ以上の若奥様として店を盛り立てたそうにございます。

そのご様子は、奉公人ばかりか出入りの方々にも快く迎えられ、幸せそうにございます。家業ばかりか熱心に子育てにも励み、むしろ、お子を産んでからの嬢ちゃまは「まるで、お人が変わった」ようにご立派な大人の若奥になられた「お子を産むと、こんなにも変わるものか」などと母性の健気を改めて褒め称えられているとでございます。

婿様は気付いておられたかもしれませんが、それに触れることもなく、相変わらず良く働き、若奥様には以前にも増して思いやり深く、仲の良い誠実で立派な若夫婦だと評判にもなつていたようにございます。

おかげで、お店は益々栄え活気に満ちているとでございます。それは奥様にとりましても、密かな念願の幸せだったに相違ございません。すでに、隠居暮らししておりますう

ちもまた「お子の様子見」などいいながら、養女が作る団子を持つてお店を尋ねるのが楽しみとなつておりました。

今は若奥様となつたサトの運ぶ茶を啜りながら、庭で遊ぶ「お子」を眺める幸せを、奥様と静かに分かち合つたのでございます。

婆二人、背中を丸め内庭の縁先で肩を寄せ合う日が来るなどと、誰が想像し得たことではございません。

ほんに、人生は様々なことがございますが、奥様にとりましてサトのことは殊更気がかりだつたに違いありません。どれほど、ご自分をお責めになられたことではございません。

思いがけず、嬢ちゃまは逝つてしまわれましたが、これもまた、神様のお計らいかと想うことにしております。嬢ちゃまは、生まれながらにして十分に愛情を注がれ、幸せな日々をお過ごしだつたはずでございます。うちが今、このようなことを密かに想ひましても罰は当たらないと想ひ、これもまた、神様のお計らい

と感謝している次第でございます。

人には、それぞれが死ぬまでの幸せの量が定められていると聞いたことがございます。もし本当とするなら、嬢ちゃまは一生分の幸せを使い果たされたのだと想うのでございます。

それに、この日までの奥様のご心痛を鑑みますと、やはりこれで良かったのだと、嬢ちゃまの墓参りに足繁く通い、感謝と冥福を祈るこの頃でございます。

何より、不条理な運命を静かに受け入れてきたサトには当然の幸せと想うのでございます。奥様にも、気がかりだったサトと過ごされた日々は、一層お幸せだったに違いありません。

そうして奥様は、あの日だまりの縁先から、静かに流れる風に乗ってサトに看取られながら、穏やかに旅立たれたのでございます。

思えば、長い道のりを、奥様とともに歩んで参りました。

とうとう、うちも古里に帰ることもなく、おつ母さんや妹達の情報も解らない

まま、この年を迎えてしまいました。そろそろ、うちも奥様の所からお迎えが来る予感が致します。うちが彼方に参りましたら、きっと奥様とは思いつきり「二人だけの秘密」を口にして懐かしみたいと存じます。

永い昔話となつてしまいました。

想えば奥様のおかげで、うちも幸せな人生でございました。

人生は「定め」と流れるままに受け止めることの平安を、つくづくと感慨深く旅の土産に致しとうございます。

皆様も、どうかごきげんよう。